

三輪眞弘教授退任記念によせて

オトモナク ウゴクモノ

音楽はこの世の中に星の数ほど存在するとしても、その音楽を通じて何か“出来事の本質”とでもいうような体験を得ることは非常に稀である。いつもそれは約束のないままに不意に訪れるとしても、絶えず揺れ動きやがて去ってしまうからだ。その後の人生をすっかり変えてしまうような体験を、いったいどれだけの人が音楽から経験し得るのだろう。そして今、どれだけの人がそのようなものを音楽に求めているかは分からない。しかし、それでも私はそうした決定的な音楽の在りようを信じてきた一人だった、ということになる。

その意味で音楽は、まず人の外に在り、稀に一瞬だけ本当の姿を見せるようなものだ。たとえ、音楽が音波の総体によって形作られるものだとしても、それ自体は表面的な見た目でしかなく、その先に、もしくはその背後に流れている何かこそが音楽の本質に繋がっている、いわば生命なのである。

夏の入道雲は気がつくとき非常に大きく形を変えていたりする。植物は年単位の周期を持ちながら繰り返し現れては消えていく。蝶々の羽音を聞くことはできないが、あのアンバランスな飛び方は不思議な魅力を持ち愛らしい。そうした身の回りの事柄は、まず私の外部にあり、それぞれの必然を持ちながら私とは無関係に存在する。しかし同じ時間と空間の中で、音もなく不意に訪れるという意味では真に音楽的なのである。ただ、音楽に比べると出来事のスケールや時間の尺度が決定的に異なっているというだけだ。私はそこに何よりも美的な魅力を、つまり音楽を見出してきた。

音楽の創り手として、自分の外部にある美的な存在を招き入れることは多くの矛盾を孕む。この難解な課題に対して作曲家・三輪眞弘は、音楽のあるべき姿を明快に示し続けてきた同時代の数少ない作曲家だと言える。例えば《またりさま》などに代表される逆シミュレーション音楽は、初期値によって確定された未来の道筋を、演算を通して身体が紐解いていくものだ。それは従来の楽譜と演奏という関係性からは極めて遠いように思われるとしても、背後にある必然（演算構造）とそれをリアライズする身体、時間と空間の共有という意味において重要な出来事（音楽的な）となる。この関係性の設計こそが、外部化された美を招き入れるための一つの器なのである。これまで作曲家・三輪眞弘のこうした音楽的感性とその思考を表す文章によって、私自身が励まされてきたものは極めて大きい。

福島 諭 ふくしま さとし（作曲家）